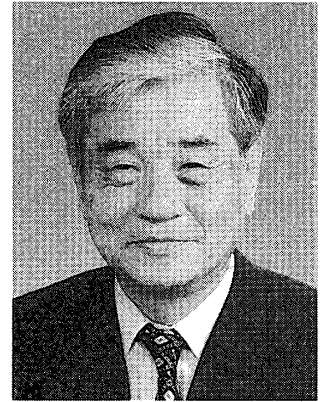


会長退任に当たって

小笠原 暁



早いもので、任期の2年がアッとと言う間に過ぎ去ってしまいました。就任早々体調を崩し、考えていたことの10分の1も果たすことができず、副会長、理事の方々にご迷惑をかけ、また会員皆様方の御期待に添えなかったことを深くお詫び申し上げます。

この2年間、絶えず私の頭の中にあったのは、長期停滞傾向を脱することができないでいるOR学会を何とか立て直すことは出来ないかということでした。40数年前、学会が発足した当時の熱気は何処へ行ってしまったのでしょうか。

学会内の熱気は今春の研究発表会の出席者数、発表件数、併行して開かれた東工大・筑波大・慶応大・早稲田大の学部3年生の発表会等々を見ても、決して冷め切ったわけではありません。むしろ盛んになりつつあるといっても過言ではないでしょう。にもかかわらず、正会員、賛助会員の数が止めようもなく減少しつつあるのはどうしてでしょうか。それは世の中のORに対する関心が冷めつつあるからではないかと思えます。企業、行政体の企画部門においてオペレーションズ・リサーチという言葉は死語になりつつあります。企業や社会の直面する問題は決して万古不易なものではなく、その時代時代によって変わっていく筈のものです。現実の問題を研究対象とするORはこ

の社会の動きに対応していかなばなりません。かつて企業における情報化が声高に唱えられた時、われわれにはその認識が薄く、経営情報学会という別の学会にこの分野を明け渡してしまいました。

ORはあくまでも社会の直面する問題の解決を目指すべきです。経済学、経営学が全く無力であるが故に、ORが取り組むべき問題はいくらかでもあります。景気、金融、年金を初めとする社会保障、地方自治体の計画・経営等々枚挙にいとまがありません。これらの問題に果敢に取り組んで、目に見える結果を出してこそORの社会的存在意義が認められることになると思います。私は問題解決の過程で使われる解析的手法の価値を低く見るものではありませんが、あくまでも解析的手法は問題解決のための手段であって、主題ではありません。

研究普及担当理事の皆さんのご努力によってORセミナーのテーマは社会の要請に応えたものになってきていますし、参加者も決して少なくはありません。学会の未来を担う若い学生達の交流も上述したように盛んになりつつあります。この上は学会一丸となって、現実的な問題解決を目指し、もって社会の学会に対する認識を再び確保することを望んでやみません。